

# 高山の文化を高めた人々 40

## 数学史と算額の研究 垣水 寿太郎

垣水 富郎

るというやり方である。これは先輩の斐太中学教頭の小西先生に教えられたノウハウであったようである。

いずれにしても集められた筆蹟は、近衛文麿、若槻礼次郎、高橋是清、林銑十郎、東條英機といった総理大臣級の方々をはじめ、島崎藤村、西田幾太郎、中村不折、坪内逍遙、東郷平八郎、湯川秀樹など各界の錚々たる諸名士に亘っている。揮毫を依頼するにあたっては、手紙に自作の漢詩を添えて送付した。拝受した揮毫の色紙はおよそ七十枚余、保存台帳と共に、依頼状の原稿なども併せて大切に保管している。

### (一) 垣水文庫

学校の勤め帰りに書店に寄って購入した書籍は、書斎の本棚に収まり切らず、土蔵の棚に山積みであった。「あの本はいつたいいつ読むの?」という家族の問いに、「退職

したら読む」が口癖であったが、結局は殆ど読めずに終わったようである。晩年になってから郷土館へ寄付する結果になった。郷土館では「垣水文庫」として保管して戴いている。

### (二) 主な研究・著作など

・昭和四年「飛驒の神社奉納の算額」(飛驒史壇)

・昭和十二年「神社・佛閣奉納の算額」(名古屋中央放送局より放送)

・昭和十三年「飛驒数学史」(ひだびと)

・昭和三十五年「濃飛に現存する絵馬について」

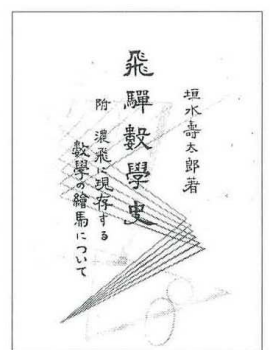
・昭和三十七年「数学記憶法」これらの功績が認められ、

昭和二十八年に高山市文化協会から表彰を受け、昭和五十年には勲五等瑞宝章を受章した。昭和五十年八月没 享年八十四歳。

### 「飛驒数学史」の巻頭の言葉から (一部略)

角竹喜登

『先生の算術額奉納史の研究は、昭和三年八月二十一日付の私宛ての書面によって、この頃から着手された事が知られる。其の後十年間の研究に花



が咲いて、昭和十二年二月にはラジオにも出演された。翌十三年六月には、美濃赤坂の明星輪寺に詣でられて算額を筆写され、以来美濃国のもので研究を続けられ、飛驒の算額史が飛濃両国の算額奉納史に地域が広められたのであって、岐阜県の文化史上意義深いことである。今回これらの貴重な研究をまとめて印刷されるにあたり、長年の研究を完成させられた御努力に深甚の敬意を表する。』

### 算額とは:

主に江戸時代、絵馬や額に数学の問題や解き方を記し、神社仏閣などに奉納したもの。

はじめは、数学の問題が解けたことを神仏に感謝し、一層勉学に励むことを祈って奉納されたが、やがて数学の問題の発表の場となり、問題のみ掲げる者や、その解答を算額にして奉納する者も現れた。

このような風習は我が国だけで、全国には九百以上の算額があるとされている。

父・垣水寿太郎は、明治四十三年に斐太中学校を卒業後四十八年間に亘り教員を勤めた。その殆どの期間は斐太中学校及び斐太高校での勤めであった。定年で退職した後も、斐太実業高校や高山西高校の講師を勤め、七十歳を過ぎても足腰が丈夫で、毎日、山口から自転車通勤し、まことに健康で元氣な父であった。生前の亡父の想い出を挙げると次のようなものがある。

### (一) 名士の揮毫収集

昭和初年当時、斐太中学の一介の数学教師であったというのに、著名人の筆蹟収集という変った道楽に凝っていた。しかもその手段は、主として現存の著名な方々へ直接に、ご本人或いは執事や夫人等を通じ、手紙で揮毫をお願いす

